

船舶事故調査報告書

平成23年4月14日
 運輸安全委員会（海事専門部会）議決
 委員 横山 鐵 男（部会長）
 委員 山本 哲 也
 委員 石川 敏 行

事故種類	火災
発生日時	平成22年7月9日 01時00分ごろ発見
発生場所	北海道釧路市釧路港東方沖 浜中町湯沸岬灯台から真方位175° 8.8海里付近 （概位 北緯42° 56′ 東経145° 11′）
事故調査の経過	平成22年7月13日、本事故の調査を担当する主管調査官（函館事務所）ほか1人の地方事故調査官を指名した。 原因関係者から意見聴取を行った。
事実情報 船種船名、総トン数 船舶番号、船舶所有者等 L×B×D、船質 機関、出力、進水等	漁船 第二十八 ^{きみ} 喜美丸、7.30トン HK2-20370（漁船登録番号）、個人所有 12.00m（Lr）×3.05m×0.92m、FRP ディーゼル機関、423kW（漁船法馬力数）、平成9年4月5日
乗組員等に関する情報	船長 男性 45歳 一級小型船舶操縦士・特殊小型船舶操縦士・特定 免許登録日 平成2年5月11日 免許証交付日 平成21年7月6日 （平成27年5月10日まで有効）
死傷者等	なし
損傷	全損
事故の経過	<p>本船は、船長及び甲板員2人が乗り組み、釧路港東方沖を浜中町^{きり}霧多布港に向けて帰航中、平成22年7月9日01時00分ごろ、船長が異常な油の臭いに気付き、操舵室内ののぞき窓から機関室内をのぞいたところ、機関室が白い煙で充満しているのを認めたため、急いで機関室に赴いたところ、主機の右舷船尾付近にオレンジ色の炎を発見した。</p> <p>本船は、直ちに主機を中立とし、乗組員が、機関室後部及び操舵室に備え付けの持運び式粉末消火器2本で消火を試みたが、消火できず、黒煙が上がり、間もなく主機が停止した。</p> <p>船長は、操舵室右舷側に搭載していた小型船舶用膨張式救命いかだ（以下「本船救命いかだ」という。）を展開し、僚船に救助を要請したのち、甲板員2人とともに退船して本船付近で漂流中、僚船に救助された。</p> <p>本船は、他の僚船によって消火活動が行われ、06時10分ごろ鎮火した。</p>

	<p>本船は、消火活動中に転覆したが、巡視船によりえい航されて霧多布港に帰港した。</p>	
気象・海象	<p>気象：天気 霧、風向 東、風力 1、気温 約14℃、視程 約30m未満 海象：波向 南、波高 約1m、水温 約10℃</p>	
その他の事項	<p>本船は、機関室の天井に軸流ファンが2台設置され、1台を給気用とし、他の1台を排気用としていたが、本事故時、排気用軸流ファンは運転されていなかった。</p> <p>本船は、機関室船尾側に主機用の燃料小出しタンク（80ℓ）が設置されていた。</p> <p>本船は、燃料油としてA重油を使用していた。</p> <p>機関室右舷船尾付近には、ウエス等の可燃物は置いていなかった。</p> <p>船長及び甲板員Bは、喫煙者であったが、機関室内で喫煙することはなかった。</p> <p>船長は、出航前に機関室内の点検を行ったが、油漏れ等の異常は認めなかった。</p> <p>船長は、平成22年4月に救命いかだを新替した際、救命いかだの展張方法を体験していた。</p> <p>本船は、船底部を残して全焼したため、廃棄処分された。</p>	
分析	<p>乗組員等の関与 船体・機関等の関与 気象・海象の関与 判明した事項の解析</p>	<p>不明 不明 なし</p> <p>本船は、釧路港東方沖を霧多布港に向けて帰航中、機関室の右舷船尾付近から出火したものと考えられる。</p> <p>本船の焼損が激しかったことから、出火の経過を明らかにすることはできなかった。</p> <p>乗組員は、船長が救命いかだの展張方法を体験していたため、速やかに救命いかだで脱出できたものと考えられる。</p>
原因	<p>本事故は、夜間、本船が釧路港東方沖を霧多布港に向けて帰航中、機関室の右舷船尾付近から出火したことにより発生したものと考えられる。</p>	